

佐倉里山大学 令和7年度公開講座

講演会 花菖蒲とノハナショウブ

日時：2025年10月12日(日)13:30～16:30(開場12:30)

会場：志津コミュニティセンター大ホール

〒285-0855 佐倉市井野794番地1

タイムテーブル

12:30	開場
13:30-13:35	主催者挨拶 佐倉市長/佐倉里山大学学長 西田 三十五
13:35-13:45	開催にあたって (公財)佐倉緑の基金代表理事/佐倉里山大学副学長 原 慶太郎
13:50-15:00	講演「花菖蒲とノハナショウブ」 玉川大学名誉教授 田淵 俊人氏
15:00-15:20	<休憩> 写真・パネル展示・各市民団体の紹介
15:20-15:35	報告Ⅰ 「佐倉里山自然公園の整備と畔田谷津の再生事業」 原 慶太郎
15:35-15:45	報告Ⅱ 「畔田谷津のノハナショウブの変遷と管理-現地からの報告-」 小野由美子
15:45-15:55	報告Ⅲ 「佐倉城址公園の菖蒲田について」 木谷 慎志
16:00-16:30	トーク 「里山とノハナショウブを遺し伝えるために」
16:30	閉会

主催：佐倉市

共催：公益財団法人 佐倉緑の基金

後援：自然環境復元学会、ノハナショウブ・ネットワーク

協力：畔田谷津ワークショップ、畔田谷津の生命を見守る会、印旛沼探検隊、

NPOいんば、NPO法人IVUSA、NPO法人水環境研究所、

風の村さくら冒険基地、佐倉里山クラブ、佐倉里山大学受講生の会、

佐倉里山支援28、佐倉里山自然公園支援し隊、佐倉染井野里山の会、

佐倉自然同好会、里山プレーパーク、東京情報大学EIL、

人と自然をつなぐ仲間・佐倉、まるごといんばぬまプロジェクト、

森のようちえん さくらんぼ、ユカリ木こり倶楽部

[もくじ]

講演要旨 田淵 俊人氏	3
講演資料	4
報告ⅠⅡⅢ要旨	10
報告資料	11

問い合わせ先：佐倉市公園緑地課 043-484-0940

[開催にあたって]

「花菖蒲」は江戸時代にわが国の野山に自生している「ノハナショウブ」から育成された、わが国伝統の園芸植物で、「花の文化財」です（田淵俊人氏のホームページより）。

花菖蒲は、印旛沼を背景にした佐倉市のイメージにふさわしい花として、1971（昭和46）年に一般公募で市の花に選ばれました。当時、鹿島川近くの田町には、1958（昭和33）年に開園した市営菖蒲園があつて、多くの市民に親しまれていました。市営菖蒲園は、1975（昭和50）年に閉園し、佐倉城址の菖蒲田に移りましたが、現在、その跡地には当時を偲ぶ石碑が建っています。

佐倉里山自然公園の畔田谷津では、2007年頃から市民と市とが協働で畔田谷津ワークショップとして休耕田となっていた湿地の再生を始めましたが、2013年にノハナショウブの開花が確認され、保全活動が功を奏して、花数が増えています。

すべての花菖蒲は各地に自生するノハナショウブを改良してつくられましたが、日本各地で開発等による生育地の喪失や生育環境の悪化によって、ノハナショウブは絶滅の危機に瀕しており、千葉県のレッドデータブック2023年版ではランクB（重要保護生物）に指定されています。遺伝資源の保全のためにも生育地に残るノハナショウブを保全しなければなりません。

2024年に開校した佐倉里山大学では、佐倉里山自然公園を対象として、「里山の歴史を学び、人と自然の関わりを知り、次の世代につなぐ人をつくる」の理念を掲げて、講義と実習をとおして里山管理を担う里山守人（もりびと）を育成する活動を進めています。開校2年目を迎え、市民向けの公開講座として「講演会 花菖蒲とノハナショウブ」を企画し、花菖蒲のもつ魅力と、その原種となったノハナショウブを保全する意義について、専門家の田淵俊人氏（玉川大学名誉教授）をお招きし講演いただくこととしました。佐倉市の花である「花菖蒲」とその原種である「ノハナショウブ」の魅力を感じ取っていただき、佐倉市の里山に生育するノハナショウブを次の世代に遺し伝えていくことに、市民の方々のご理解とご協力をいただけることを願ってこの講演会を企画しました。

田淵俊人（たぶち・としひと）氏のプロフィール

1959年鳥取県生まれ。1982年玉川大学農学部農学科卒業。日本信販株式会社（現三井UFJニコス）入社。1986年東京農工大学大学院農学研究科修士課程修了、同年 玉川大学農学部助手、講師、准教授、教授。2024年同大名誉教授。2001年博士（農学）（東北大学）。

専門は園芸学。花菖蒲やトマトの原種の遺伝的特性を解明することで、品種改良の歴史や新たな有用機能を研究し、原種の重要性と多様性の保存を訴えている。『花の品種改良の日本史』（2016）に「ハナショウブ」の章を執筆されるなど、花菖蒲と原種のノハナショウブに関して数多くの研究成果を発表され、我が国におけるこの分野の第一人者である。

[講演要旨] 花菖蒲とノハナショウブ

玉川大学名誉教授 田淵 俊人

田淵の花菖蒲ホームページ <http://www.tamagawa.ac.jp/agriculture/teachers/tabuchi/dictionary/>

無許可での図、文章の転用はしないでください

「花菖蒲」は、わが国が世界に誇る伝統園芸植物の一つで、江戸時代の中期から後期にかけて発達した。日本に自生する「ノハナショウブ」という野生の草花を使って育成された点で、日本人の手による純国産の花といえる。

梅雨の晴れ間に浮かび上がるよう咲く花菖蒲は、紫陽花と並んで季節感が溢れる花の代表として江戸時代から多くの人々を魅了してきた（図1）。わが国に自生するこれらのアヤメ科植物の区別を図2に示した。

花菖蒲の栽培の歴史は、古文書の記録によると今から約800年前に慈円が『拾玉集』に記載したのが始まりとされる。水野元勝の著した『花壇綱目』（1681年）に「花菖蒲」の名が登場するので、江戸中期には鑑賞対象にされていたと思われる。

本格的な花菖蒲の品種育成は、江戸後期に江戸の旗本・松平左金吾（菖翁）により行われた。菖翁は野生のノハナショウブの種子を集めて品種を育成したので「花菖蒲中興の祖」と呼ばれる（図3、4）。その後、品種改良が進み江戸・堀切一帯に多くの花菖蒲園が開設されたので、育成地に因んでこれらの品種群を「江戸系花菖蒲」と呼んでいる（図5）。

さらに、肥後地方で大輪・豪華絢爛な「肥後系花菖蒲」、伊勢・松阪地方では花被が大きく垂れ下がる「伊勢系花菖蒲」が育成された（図6）。明治維新後は国際化が進み大船品種群、アメリカ系品種群が誕生した（図7）。

昭和になると戦争によって、花菖蒲品種の多くが喪失した。辛うじて残った株は以前に存在していた品種か不明であることも多く、戦後は異なる系同士を交雑して育成した品種が少なくないので、由来系統が不明の品種を「新花」と呼び、戦前からの品種は「古花」として区別している（図8）。

野生のノハナショウブは、日本を中心とし一部ロシアに分布している（図9、10）。花の形や花色に変異はないと言われてきたが、本学の39年の研究によって自生地ごと、同一自生地内で個体ごとに各器官に様々な変異があることが明らかになった（図11、12）。変異は花菖蒲の品種育成の源になったので遺伝資源として重要である。近年、ノハナショウブは激減し絶滅の危機に瀕している。その主な原因は①地球規模の温暖化による乾燥化と、それに伴う種の多様性の変化、②人工造成物による自生地の減少、③花菖蒲との交雫による遺伝子攪乱、④人為的なキショウブ等の帰化植物の植栽による自生地喪失、⑤維持・管理の担い手の不足などである（図13、14）。

国際的な生物多様性条約などの締結、里山条例などにより各地で動植物の保護活動が盛んに行われているが、ノハナショウブは今まで保全・保護をされてきた例は極めて少なく、放置されてきたと言っても過言ではない。花菖蒲がわが国の「文化財」として維持・保存されるためには、「遺伝資源」としてのノハナショウブの存在が不可欠である。その重要性を再度認識した上で保全対策を行うことは、今後非常に重要な課題である。

[講演資料]



1859年 三代歌川豊国「堀切花菖蒲花盛図」

明治神宮「林苑」

(葛飾郷土と天文の博物館所蔵)

図1. 江戸時代に描かれた浮世絵の花菖蒲（左）と、現在の明治神宮の花菖蒲園（右、林苑）



図2. アヤメ科植物の花器官の違い(花被片の基部の色、開花期、自生する環境がそれぞれ異なる)

菖蒲湯に使うショウブの葉は（右）、ノハナショウブの葉によく似ているが、全く別種のサトイモ科の植物である。なお、同じ形をしていて花被の色が黄色い「キショウブ」は、国立環境研究所により日本の侵略的外来種ワースト100の指定種となり、生態系被害防止外来種リストの重点対策外来種に指定されたので、日本在来のアヤメ科植物とは一緒に栽培しないように注意が必要である。



図3. 菖翁が花菖蒲の育成に用いたと考えられる野生のノハナショウブ（左）

品種に選んだ花の形や色には、菖翁独自の美的感覚があった（右）

花菖蒲とは、
どのような花？

菖翁によって育成されたハナショウブ



図4. 松平左金吾によって育成された花菖蒲の品種（菖翁花）

堀切一帯に花菖蒲園が開設、江戸庶民の行楽地に発展
なぜか？

堀切一帯に花菖蒲園が多かったのはなぜ？

湿地でしばしば水に浸る場所であった（花菖蒲は水路を好む）

「堀切の里花菖蒲 総本江戸土産」(1843) 作者不明
「名所江戸百景 堀切の花菖蒲」(安政4年(1857) 初代森川広重)

水田の脇に植えられている風景。今でもハナショウブを見ている場所で見ることができる（黄色で囲った部分）

江戸から近づいて行きやすかった

江戸花菖蒲（「菖蒲花」を受け継ぐ品種）
「小高園来歴」による「菖翁」培養と言われる品種

王昭君 雲の上

雪中花 大江戸

図5. 堀切一帯に花菖蒲園が開園した（左）。菖翁育成の品種は、江戸系花菖蒲の
発展に繋がっていった（右、「小高園」育成の江戸系花菖蒲）



図6. 肥後系花菖蒲（左、菖翁より分与された品種で育成）

伊勢系花菖蒲（右、地元のノハナショウブを使って育成）



図7. 大船品種群（左、宮沢文吾博士による）とアメリカ系品種群（右、ペーン氏による）

玉川大学農学部 教授
田淵俊人のホームページ

研究テーマ一覧
花菖蒲図鑑
ノハナショウブ
社会活動
教育研究活動
卒業研究テーマ
玉川大学収穫祭
学会 Academic Society
論文 Discourse
書籍紹介 Books
プロフィール Profile
リンク Link
トップページ Top

花被片
花柱枝

江戸古花
→江戸時代に育成
江戸系に分類される
江戸時代の育成ではない

新花(江戸花容)
→江戸系の花の形をしている
江戸時代の育成ではない

伊豆の海
Ixar-no-Umi

花被片
外花被
内花被
花柱枝

図8. 系の混乱. 左は育成者が明確で、明らかに江戸系花菖蒲の品種（古花）。

右は何系同士を交雑して育成したかは由来は不明であるが、花の形が

江戸系に似た平咲きなので、新花（江戸花容）とした品種。

ただし、観賞価値において優劣はない。（玉川大学・花菖蒲図鑑のホームページより抜粋）

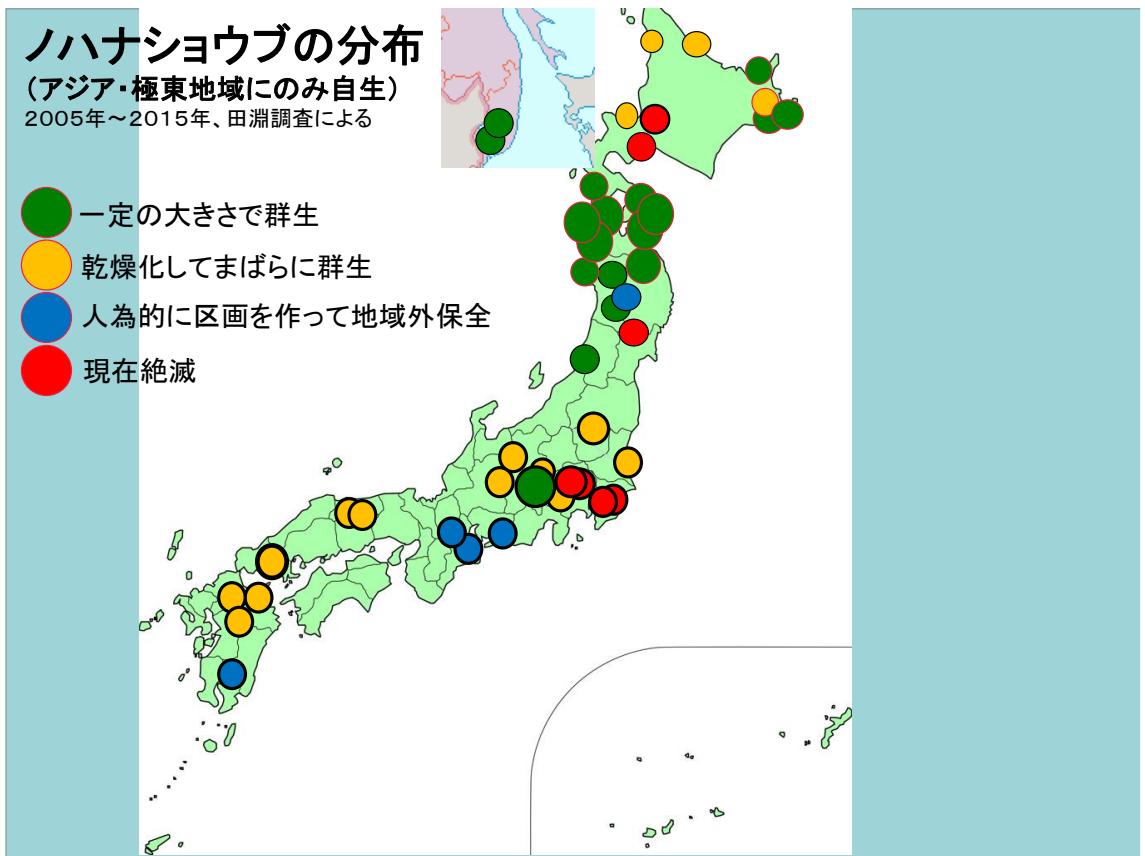


図9. 野生のノハナショウブの分布（1986年から2025年までの約39年間にわたる本学での調査による）



図10. 霧の中のノハナショウブの大群落（左）
 江戸時代の風景に似たノハナショウブの自生地（右）



図 11. ノハナショウブの花器官の形態、花色の変異。

淡い花色の変異（左、桃色に見える）と花被片数が6枚になった
変異株（右）



図 12. ノハナショウブの花の形態（左）と花色の変異（右）



図 13. 遺伝子攪乱の実例

（ノハナショウブの群落中に、善意で花菖蒲を植えた結果、
この地域のノハナショウブがピュアでなくなってしまった）

地球温暖化

冬山に降雪が無い

湿原に入る水が減少

ノハナショウブの
自生地の乾燥化



乾燥に強い植物に
による侵食
(シラカバやリンドウ)



2013年7月



シカの増加
→食害増加



経済的な不況

キャンプ人口の減少
休暇がとれない
経済的に窮屈

経済的援助不足

人間を怖がるシカがキャンプ場を
なくしたために湿地内に入り込み
食害を助長

ノハナショウブ保護への
関心、啓蒙、重要性が無い!

自生地の保護対策

高齢化による
管理の困難

図 14. 地球規模の環境変化によるノハナショウブの喪失の例

[報告]

報告 I 佐倉里山自然公園の整備と畔田谷津の再生事業

公益財団法人 佐倉緑の基金 原 慶太郎

佐倉里山自然公園は、下志津と畔田両地区の台地と大小4つの谷津からなる73.8haの区域で、2006（平成18）年に佐倉市が土地を購入し、2007年に基本整備方針、2009年に整備基本計画を作成し、（仮称）佐倉西部自然公園として市民協働による維持管理が進められた。谷津環境が良好な畔田谷津を対象として、2007年から市民と市が協働で、谷津環境の再生と保全をすすめる畔田谷津ワークショップの活動が始まり、休耕していた一帯の自然環境の復元・再生が進められている。この地に、2013年に初めてノハナショウブの開花が確認され、保全活動が続けられている。本年、環境省の自然共生サイトに認定された。

2023年に、公園の名称を定め、「佐倉里山自然公園整備基本構想」を策定し、佐倉市を代表する里山環境を保全、活用、共創することを基本方針として、公園整備や自然環境の保全、そして利活用が進められている。

報告 II 畔田谷津のノハナショウブの変遷と管理—現地からの報告—

畔田谷津ワークショップ／公益財団法人 佐倉緑の基金 小野 由美子

佐倉市のノハナショウブ群落は、佐倉里山自然公園内の畔田谷津で見ることができる。

畔田谷津下流域では、2013年に開花が初めて確認された後、株数は順調に増加し、農道沿いや散策路沿いなど生育区域の総面積は2,000m²となった。花茎数（花を付ける茎の数）は今では千本を超えていている。

このように順調な生育を遂げることができたのは、湿田跡地として土壤や水分条件が適していたことなど複数の要因があげられるが、年数回の草刈りによってヨシなどの競合種を抑制できたことが、大いに貢献したと考えられる。また、受粉をしてくれるマルハナバチ類の生息適地である里山に立地していることも見逃せない。ノハナショウブは、里山のいきものとつながりながら、私たちの管理に守られながら、順調に生育している。

○お願い：佐倉里山自然公園内に花菖蒲を植栽しないでください。交雑すると原種としての遺伝子型が失われてしまうので。（佐倉城址公園の菖蒲田までは直線距離4kmと離れているので問題ありません）

報告 III 佐倉城址公園の菖蒲田について

佐倉市公園緑地課 木谷 慎志

佐倉城址公園の菖蒲田では、花菖蒲が四季折々の風情を演出し、地域の皆様に長年親しまれてまいりました。近年、生育状況の悪化を受け、令和4年度に土壤調査を実施し、翌令和5年度には土壤の全面入れ替えを行いました。新たな土壤のもと、2,266株の花菖蒲の苗を植え付け、菖蒲田は再生への一歩を踏み出しました。また、菖蒲田内の渡り板についても老朽化が進んでいたため、同時期に改修工事を実施し、来園者の皆様が安全に散策できる環境を整えました。

現在、花菖蒲は着実に成長を続けており、令和8年度には株分けを予定しています。健やかな成長には、天候の影響はもとより、水管理や除草など、繊細で丹念な手入れが欠かせません。

佐倉市では、花菖蒲の美しい景観を皆様にお届けするため、今後も丁寧な管理と整備に努めてまいります。

[報告資料]

佐倉市と花菖蒲

佐倉市の花である「花菖蒲」は、印旛沼を背景にした佐倉市のイメージにふさわしい花として、1971（昭和 46）年の一般公募で選ばれました。当時、鹿島川近くの田町には、1958（昭和 33）年に開園した市営菖蒲園があって、多くの市民に親しまれていました。1975（昭和 50）年に閉園し、佐倉城址の菖蒲田に移りましたが、現在、その跡地には当時を偲ぶ石碑が建っています。



写真 1, 2. 佐倉市営菖蒲園 1960（昭和 35）年 林辰雄氏撮影（千葉県立中央博物館所蔵）（左・中）
写真 3. 市営菖蒲園跡の碑（右）

写真 4. 佐倉城址公園菖蒲田

2025/06/08



写真 5. 菖蒲田の花菖蒲

2025/06/08



畔田谷津とノハナショウブ

佐倉市の西部、下志津と畔田に跨がる地に畔田谷津があります。1990年代に水田耕作が休止されヨシやスゲ類からなる湿生草地が広がっていました。谷津低地を埋め立てる計画が持ち上がり、2006（平成18）年に佐倉市が（仮称）佐倉西部自然公園用地として取得し、翌年の2007年に、市と市民の協働による畔田谷津ワークショップが立ち上げられ、谷津環境の再生が進められてきました。2013年に谷津の一郭にノハナショウブの開花が確認され、その後、ワークショップの保全活動によって年々開花数が増加しています。



写真6. 畔田谷津 2025/05/17



写真7. 畔田谷津のノハナショウブ 2025/06/13

当地のノハナショウブは、花色の変異が大きいことが特徴です。ハナバチ類の訪花によって他の株からの受粉が盛んに行われ、種子による個体群の増加がみられるためと考えられます。ノハナショウブの個体群を保全していくためには、競争相手となる周りの植物の刈取りと併せて、ハナバチ類の生息場所となる谷津や斜面の森林を含む多様な生態系をよい状態で維持していくことが必要で、そのためにも里山管理を継続していくことが重要です。



写真8. 畔田谷津のノハナショウブの花色の変異 2025/06/17



写真9. トマラルハナバチがノハナショウブの花柱（雌しべ）を押し上げて中に潜入（左）と吸蜜を終えて退出（右） 2023/06/11



（この頁の写真：原慶太郎撮影）

佐倉里山大学 令和7年度公開講座

講演会 花菖蒲とノハナショウブ 配布資料

発行年 2025年10月12日

編集 佐倉里山大学公開講座実行委員会

協力 ノハナショウブ・ネットワーク

発行 公益財団法人佐倉緑の基金・佐倉市